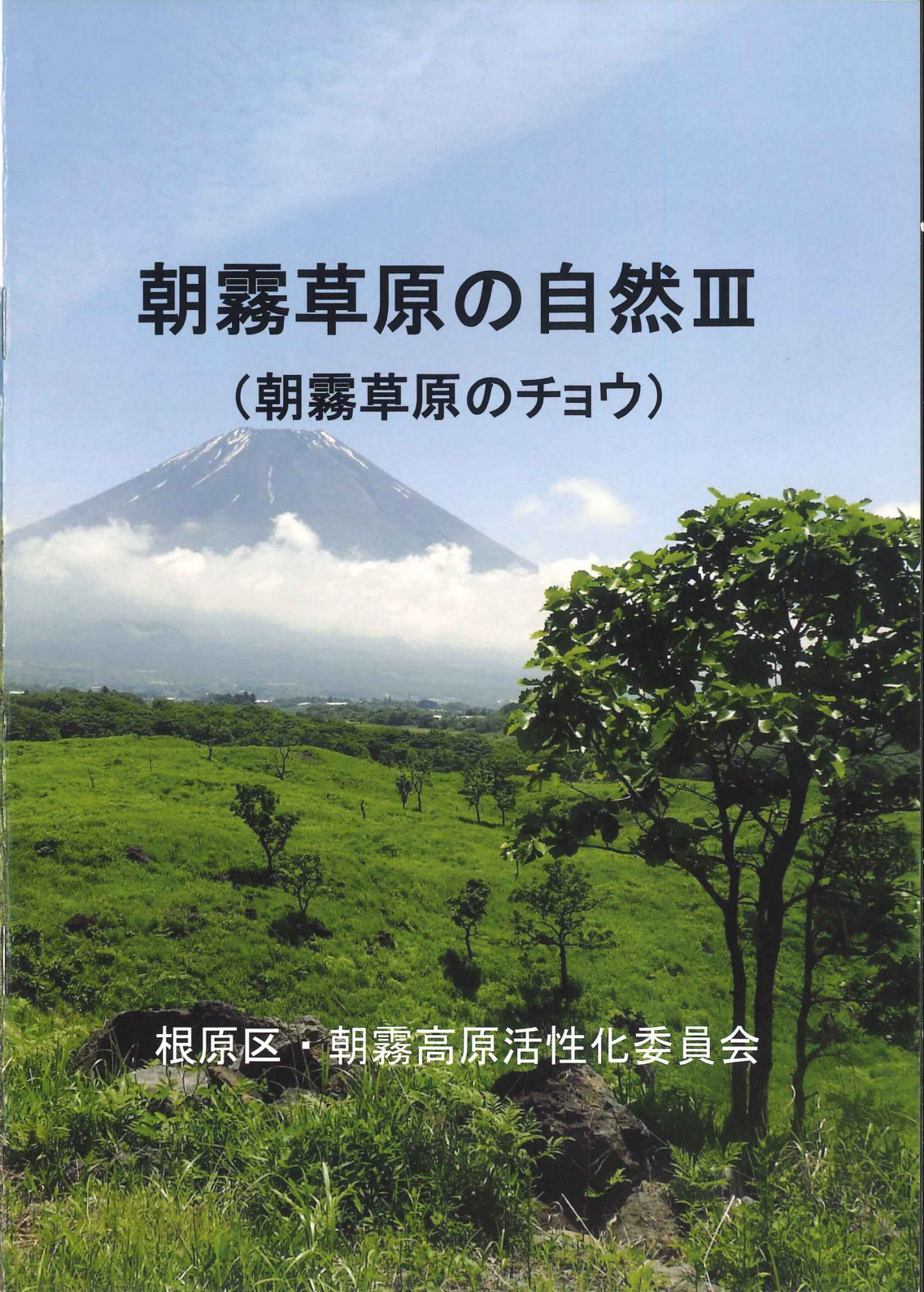




朝霧草原の自然Ⅲ（朝霧草原のチョウ）
根原区・朝霧高原活性化委員会 2019



朝霧草原の自然Ⅲ

（朝霧草原のチョウ）

根原区・朝霧高原活性化委員会



ヒメシジミ



ヒメシロチョウ



ホシミスジ



ゴマシジミ



ヒョウモンチョウ



ハヤシミドリシジミ



コキマダラセセリ



ウラギンスジヒョウモン

はじめに

根原区財産区に在ります「朝霧草原」は、江戸時代より300年余りにわたり火入れが行われてきました。昔は家畜の秣場(まぐさば)として、また屋根材や炭俵用の茅場として利用がされてきました。平成24年には文化庁の「ふるさと文化財の森朝霧高原茅場」の設定を受け、屋根材としての茅を産出しています。さらには景観という観点から「朝霧草原」は、朝霧高原の景観を形成する上で重要な部分を占めています。

一方で根原区民が高齢化し、地区の農林業が衰退する中、茅場への依存度が低下し、火入れの継続が困難になりつつあります。

そこで火入れを継続する意義を再認識する為、茅場の持つ多面的機能と生物多様性の調査を行い、その成果をここに「朝霧草原の自然Ⅲ(朝霧草原のチョウ)」として紹介することとなりました。この冊子が根原区民のみならず、多くの方々に「朝霧草原」について知って頂くきっかけになれば幸いです。

なお、この事業は富士山の銘水株式会社の助成を頂きました。

平成31年2月

根原区長・朝霧高原活性化委員会会長
吉川 清人

目次

1. チョウから見た富士山の特徴	1
2. 草原のチョウを残してきたもの	2
3. 朝霧草原の貴重なチョウ	3
4. 朝霧草原のチョウの生息場所	4
5. 朝霧草原のチョウ	7

朝霧草原のチョウ

1. チョウから見た富士山の特徴

富士山は日本一の高さと整った円錐形の姿を誇る山だが、チョウ相から見るとそれとは違った特徴が見えてくる。日本一高いのに「高山チョウ」と呼ばれるチョウは1種もない。それらは寒冷な気候の氷河時代に日本列島にやってきて、氷河時代が終わり温暖化したため南アルプスの高山地帯に逃げ込んで今日まで生き残ったチョウである。だが富士山は氷河時代が終わった後もまだ噴火活動を続けていたため高山チョウは生息できなかった。富士山の中腹には森林が発達して森林性のチョウが見られる。しかし地形が単純なため南アルプスなどの周辺山地ほど豊かではなく、富士山特有のチョウはいない。

その一方で富士山麓を中心に分布しているチョウが十数種類いる。中でもヒメシロチョウ、ヤマキチョウ、ハヤシミドリシジミ、ヒメシジミ、アサマシジミ、ゴマシジミ、ヒョウモンチョウなどは静岡県では富士山麓にしか分布していない。それらは標高 500m~1200m の草原に生息するチョウであり、幼虫の食べ物や成虫の蜜源として草原やその周辺の植物を利用し、草原を生活の場としている。これらのチョウの生息する西麓の朝霧高原をはじめ、東麓の大野原、北麓の梨ヶ原など山麓に広がる温帯草原こそ、富士山の特徴であるといえる。



ヒメシロチョウ



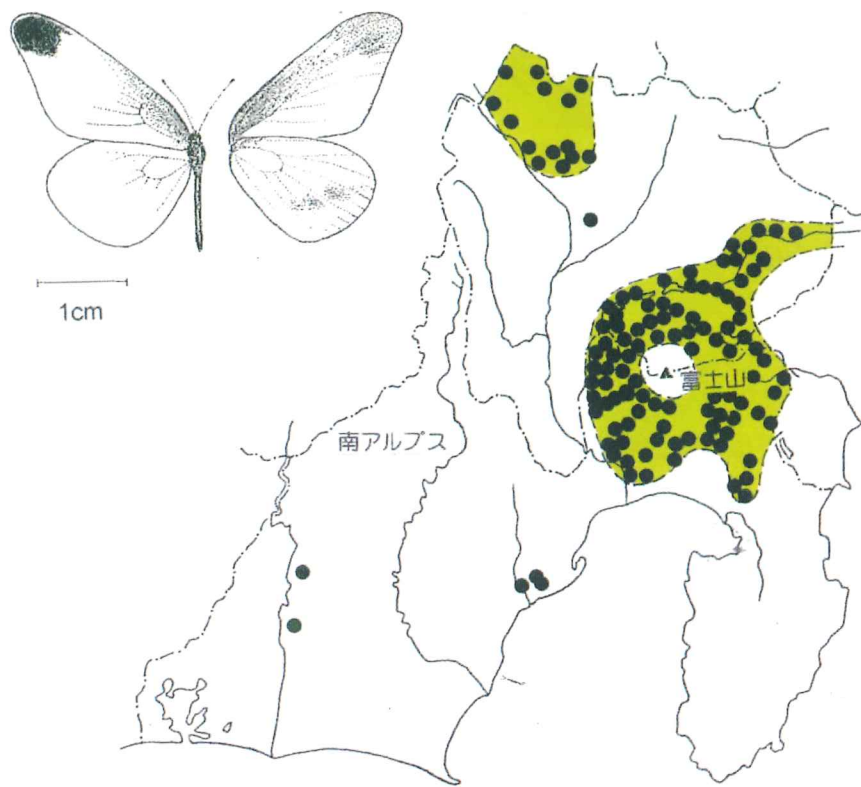
ヒメシジミ



アサマシジミ



朝霧高原北部地域概要図



ヒメシロチョウの分布

2. 草原のチョウを残してきたもの

富士山を特徴づけるこれら温帯草原性チョウ類は、寒冷で乾燥した草原の発達しやすい気候の氷河時代に、当時陸続きだった大陸から日本列島にやってきたものである。氷河時代が終わった後氷期の温暖で湿潤な気候下では森林化が進み草原は減少してきたが、火山山麓や扇状地といった、噴火や洪水によってしばしば植生が更新され、水が伏流水となって流れる透水性の高い土壌のため乾燥し群落遷移が進みにくい土地にできた草原を逃避地（レヒュジア）として生き残った。しかしそのような草原も火山噴火や洪水が都合よく起こらなければ続か

ない。その草原を維持してきたのが縄文時代から続く人々の活動による干渉だった。それはやがて肥料や飼料、屋根ふき材などにするための草刈り、牛馬の放牧、良質な草地を維持するための野焼きという伝統的な生産活動として近年にまで続けられてきた。このような草原は半自然草原と呼ばれる。半自然草原を人為的な植生として低く評価してはいけない。人が作り出した植生ではなく、氷河時代といった過去の植生、過去の生物を人の手によって現在にまで守り残してきた維持植生である。一度失ったら復元できない自然の遺産である。



朝霧草原

3. 朝霧草原の貴重なチョウ

今回の調査区域である根原地区の朝霧草原には、静岡県から絶滅したと思われるアサマジミ、一部地域を除いて絶滅した可能性の高いヒメシジミ、県絶滅危惧種で富士宮市指定特別希少種のクロシジミも生息していた。隣接地には静岡県絶滅種のチャマダラセセリ、アカセ

セリ、絶滅危惧種のホシチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、ヒメシロチョウも見られた。

今回の調査では47種のチョウを確認した。おそらくは50種以上の、集落内や周辺地域も含めれば7~80種のチョウが生息していると考えられる。中でも絶滅危惧種で環境省の希少野生動植物に指定されているゴマシジミ、静岡県レッドリストの絶滅危惧種のヒョウモンチョウ、ハヤシミドリシジミは貴重なものであり、ほかに準絶滅危惧種のウラギンスジヒョウモン、ホシミスジ、要注目種のギンイチモンジセセリ、コキマダラセセリ、オオチャバネセセリ、ムモンアカシジミの生息も確認した。ムモンアカシジミが静岡県で確認されたのは今回を含めて3例しかない。また、確実ではないが絶滅危惧種ヤマキチョウと思えるチョウも目撃しており、他の希少種の生息も期待される。

このような貴重なチョウが見られる朝霧草原に匹敵する場所は静岡県内には他にない。

4. 朝霧草原のチョウの生息場所

朝霧草原はススキを主とする草原であり、ススキを幼虫の食草とするジャノメチョウ、コキマダラセセリが多いのが特徴であり、他にミヤマチャバネセセリや数少なくなったギンイチモンジセセリの生息も確認できた。

草地の中にはカシワの木が点在する。カシワは火に強く山火事の跡や野焼きの行われる所に疎林を形成し、カシワを食樹とするハヤシミドリシジミが生息している。ハヤシミドリシジミが静岡県の中でも朝霧高原だけに分布しているのは野焼きが行われてきたからで、野焼きをせずに放置した場所ではやがて他の樹木に埋もれカシワもハヤシミドリシジミも見られなくなっている。カシワの疎林を含む草原、というのが富士山麓の景観である。

朝霧草原の中心部を占める茅の採草地はススキが密生しているが、中を通る茅の搬出路周辺には蜜源となる植物も育ち、ジャノメチョウ

はじめ各種のチョウが見られた。



野焼きによって維持された草原とカシワの疎林

チョウの多いのは周囲の防火帯であり、中でも給水施設周辺や集落に近い手作業による草刈りの行われている背の低い草地部分にはチョウの蜜源となるノアザミ、タムラソウや、ワレモコウなど幼虫の食草となる植物が多く見られる。ウラギンヒョウモンなどスミレ類を食草とする大型ヒョウモン類のためにも背丈の低い草地は重要である。

山梨県境に接する大型機械による防火帯は外来植物も多いが環境の多様性を増すという効果はあり、ホシミスジやシータテハなどこの部分でしか確認されていないチョウも何種かあった。

割石峠付近の小高い乾燥した部分にもチョウにとって良い草地がみられ、オカトラノオにはヒョウモンチョウが、タムラソウには各種チョウ類が訪れていた。

ブドウ園と国道との間は人為度の高い草地となっていて、ヒメジョ

オンヤルドベキアなど外来植物が多く、モンシロチョウ、モンキチョウといった人里種が多かった。

このような貴重な草地を維持する上で野焼きと防火帯の草刈りの継続は必要である。また、希少種のゴマシジミや生息の可能性のあるクロシジミは採集が禁じられており、採集圧を防ぐ上で気を付けてゆく必要がある。

参考文献

須賀丈・岡本透・丑丸敦史, 2012. 草地と日本人 日本列島1万年の旅. 築地書館, 東京.

清 邦彦, 1988. 富士山にすめなかった蝶たち. 築地書館, 東京.

高橋真弓, 1971. 富士山の蝶類. 富士山. 富士山総合学術調査報告書, 富士急行, 966-983.

高橋真弓, 2002. 富士山域の蝶類. 富士山の自然と社会, 国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所, 129-139.

5. 朝霧草原のチョウ

今回の調査では 47 種のチョウを確認した。この中から比較的目にする事の多い 39 種について解説すれば次のとおりである。

◆解説した種のリスト

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. キアゲハ | 21. ミドリヒョウモン |
| 2. ウスバシロチョウ | 22. ツマグロヒョウモン |
| 3. モンキチョウ | 23. ホシミスジ |
| 4. モンシロチョウ | 24. コミスジ |
| 5. スジグロシロチョウ | 25. アサマイチモンジ |
| 6. ヤマトスジグロシロチョウ | 26. キタテハ |
| 7. キタキチョウ | 27. アカタテハ |
| 8. ウラギンシジミ | 28. ヒメアカタテハ |
| 9. ムラサキシジミ | 29. クジャクチョウ |
| 10. ハヤシミドリシジミ | 30. アカボシゴマダラ |
| 11. ベニシジミ | 31. ジャノメチョウ |
| 12. ウラナミシジミ | 32. ヒメウラナミジャノメ |
| 13. ゴマシジミ | 33. ダイミョウセセリ |
| 14. ヤマトシジミ | 34. ギンイチモンジセセリ |
| 15. ルリシジミ | 35. コキマダラセセリ |
| 16. ツバメシジミ | 36. ヒメキマダラセセリ |
| 17. ヒョウモンチョウ | 37. イチモンジセセリ |
| 18. ウラギンヒョウモン | 38. ミヤマチャバネセセリ |
| 19. ウラギンスジヒョウモン | 39. オオチャバネセセリ |
| 20. オオウラギンスジヒョウモン | |

キアゲハ

黄と黒の縞模様の大型のチョウで、人家の周りで見かけるアゲハに似るが、本種はもっと黄色が濃い。春から秋にかけて開けた草原上を飛び山頂の草地にもよく集まる。幼虫の食草は各種のセリ科植物で、庭のパセリ、畑のニンジン、湿地のセリ、草原のシシウドなどを利用するので、人里から山地まで幅広くみられる。



ウスバシロチョウ

羽が透き通った白色の中型のチョウ。これでもアゲハチョウの一種である。樹林に接する明るい草地や牧草地の上をゆるやかに滑空するように飛ぶ。食草はムラサキケマン。もともとは富士山には分布していなかったが原野の開発が進むにつれて朝霧高原一带にも侵入。今では初夏に一番目につくチョウになっている。



モンキチョウ

中型の黄色い蝶だがメスには白いものもある。明るい草原の上を活発に飛び、春から秋までよく見られる。ノアザミ、マルバハギといった茅場に自生する花から栽培植物のマリゴールド、ルドベキアにもよく訪れていた。幼虫の食草は各種のマメ科植物で、付近ではアカツメクサもよく利用されていると思う。



モンシロチョウ

もっともよく知られた白いチョウ。幼虫の食草がキャベツやダイコンなどのアブラナ科の栽培植物であるため、これらの野菜とともに古い時代に日本に入った外来昆虫の可能性がある。春から秋にかけての長期間、集落周辺に見られ、成虫も外来植物のヒメジョオンをよく訪れていた。



スジグロシロチョウ

白いチョウといってもモンシロチョウばかりではない。モンシロチョウは黒い紋があるが本種ははねの脈に沿って黒いスジがある。野生のアブラナ科植物を食草としており、日本に古くからいたのは本種の方だと考えられる。春から秋にかけて見られ、イヌゴマの花などを訪れる。



ヤマトスジグロシロチョウ

スジグロシロチョウによく似ていて、その区別は図鑑などで調べないと難しい。前種よりも乾燥した環境を好み、一般には多くはないが朝霧草原一带は乾燥しやすい土壌であるため比較的よく生息している。アブラナ科の中でもハタザオ類を食草として利用している。



キタキチョウ

モンキチョウよりも小型の黄色いチョウで飛び方もおとなしい。成虫で越冬するため朝霧草原でも春から秋遅くまで一年中よく見られる。メドハギや茅場のマルバハギが食草となっていると思われる。成虫はノアザミ、マルバハギ、チダケサシの花を訪れていた。



ウラギンシジミ

シジミチョウとしては大型で、裏側は銀色一色だが表側はオスは赤色、メスは水色という目立った色彩をしている。フジヤクズなどマメ科植物を食草とする。成虫で越冬するが秋になると数が増えてくる。林縁ややぶの周りに多いチョウだが時には朝霧草原の茅場内にも飛来し活発に飛んでいた。



ムラサキシジミ

はねの表側は鮮やかな紫色をしたシジミチョウだが、裏側は地味な褐色である。成虫で越冬するため春から秋にかけて見られる。アラカシなどを食樹とする樹林性のチョウだが、朝霧草原内でも周辺から飛来したものと思われる個体をしばしば見ることがあった。



ハヤシドリシジミ

オスの羽の表側は鮮やかに輝く金緑色をしている美しい種だがメスは褐色。裏側は両性とも灰色である。幼虫はカシワの葉を食べて育つ。成虫も日中はカシワの葉上に止まっていて、枝をたたくと驚いて飛び出す。静岡県ではカシワの疎林が点在する朝霧高原のみに生息し、県の絶滅危惧種になっている。



ベニシジミ

濃いオレンジ色が美しい小型のチョウで、春から秋にかけて見られ数も多い。ヒメジョオン、サワヒヨドリなど各種の花を訪れる。飛び方は活発だが長く飛び続けることはない。食草はスイバやギンギシで、人家や牧草地周辺など人為的な環境に適応したチョウである。



ウラナミシジミ

はねの表はうす紫、裏側に波模様のあるやや大きめのシジミチョウ。食草はマメ科植物の花などで、成虫はマルバハギなどの花を訪れる。暖かい土地で冬を越し、夏の終わり頃から朝霧草原にも毎年姿を見せ活発に飛翔しているが、寒さに弱く越冬することはできない。



ゴマシジミ

シジミチョウとしては大型で8月上旬を中心に姿を見せる。富士山麓のものははねの表が黒いタイプ。幼虫はワレモコウの花穂を食べたのち地表に降りてアリの巣の中に入りアリの幼虫を食べるといった特異な生態を持つ。国の希少野生動物植物に指定され、採集は禁止されている。



ヤマトシジミ

人家の周りでもっとも普通に見られる小型のシジミチョウで、地表近くを低くはうように飛んでいることが多い。はねの表側はオスは青、メスは黒色で、裏側はどちらも灰色の地に黒い点が並ぶ。幼虫はカタバミの葉を食べる。人為的環境である集落内には多くいても、茅場そのものには少ない。



ルリシジミ

鮮やかな明るい青色のシジミチョウではねの裏側は白っぽい。幼虫はマメ科植物の花やつぼみを食べる。林縁や低木上など地表より高めの所を活発に飛びまわり、時には地表に降りて吸水していることもある。茅場周辺に見られるマルバハギ、クララなどで育っていると思われる。



ツバメシジミ

前2種と同じような小型のシジミチョウで、はねの表はオスは青色、メスは暗褐色。後ろばね裏側の先にオレンジ色の紋と尾状突起があることで他のシジミチョウと区別できる。幼虫の食べ物はシロツメクサなどマメ科植物の葉や花で、茅場ではマルバハギも利用されていると思われる。



ヒョウモンチョウ

夏に見られるオレンジ色に黒斑のあるチョウで、ワレモコウを食草とする。以前は朝霧高原の各地で多く見られたチョウだったが、2000年以降静岡県内ではわずかな記録があるのみとなった。朝霧草原北端の割石峠付近でオカトラノオの花に来ていた1頭を確認することができた。県絶滅危惧種。



ウラギンヒョウモン

表側は他のヒョウモンチョウ類同様のヒョウ模様だが、裏側には銀色の紋が散らばる。6~7月に多く見られ、明るい草原上を活発に飛び回り、ノアザミの花を好んで訪れる。幼虫はスマレ類の葉を食べる。近年各地で減少が著しい種だが、朝霧草原には生き残っている。ノアザミとともに大事にしたい。



ウラギンスジヒョウモン

ヒョウモンチョウ類は似たものが多いが、本種は後ろばね裏側に銀色の点が一列に並ぶのが特徴。以前は特に珍しいチョウではなかったが近年前種以上に各地から減少が著しい。食草はスミレ類。本種の生息する朝霧草原は貴重な存在である。準絶滅危惧種。



オオウラギンスジヒョウモン

前種ウラギンスジヒョウモンよりははねの先が尖り、裏側の色合いが緑味を増すことで区別できるが判別は少し難しい。以前は前種より少なかったが、群落遷移の進んだ環境を好むからなのか近年は本種の方を見ることの方が多い。7~9月、アザミの花などに来ている。食草はスミレ類。



ミドリヒョウモン

大型ヒョウモンの表側はどれもよく似たヒョウ模様だが、本種は後ろばねの裏側が緑色味を持つのでこの名がある。広い草地よりも林縁的環境を好むためか、この仲間では比較的数字が多い。幼虫の食草はスミレ類。夏から初秋、タイアザミ、サワヒヨドリ、タムラソウなどの花を訪れる。



ツماغロヒョウモン

後ろばねのへりが黒く、メスの前ばねの先半分が黒っぽい藍色なので、他の大型ヒョウモン類とは容易に区別がつく。以前は稀な南方系のチョウだったが、近年は増加して普通に見られるようになった。食草はスミレ類。夏から秋にかけて数を増し、各種の花、特に栽培植物のキバナコスモスによく集まる。



ホシミスジ

暗褐色の地に三本の白線があるのでミスジというが、その1本目が5つの小斑に分かれることで区別できる。富士山麓を中心に分布し、成虫は夏に見られる。食樹のシモツケは溶岩上に生えることも多いので、朝霧草原では山梨県境の防火帯で確認した。準絶滅危惧種。



コムスジ

ミスジチョウ類では最も普通に見られる。この仲間はパタッパタッと羽ばたきと滑空を交互に繰り返すように飛ぶ。ミスジの1本目のスジが2つに分かれていることで区別する。幼虫はフジなど各種マメ科植物の葉を食べ、晩春から初秋まで樹林周辺に見られる。茅場周辺の林縁部に見られた。



アサマイチモンジ

暗褐色の地に1本の白条のある中型のチョウ。付近にはよく似た近縁のイチモンジチョウも生息していると思われるが、両種の区別は難しい。食草はつる植物のスイカズラで、両種とも草原に手を加えなくなったために増えた茂みの周りに多く、茅場周辺の林縁部に見られた。



キタテハ

黄褐色のタテハチョウ。成虫で越冬するため春から晩秋まで一年中見られるが初秋に増える傾向がある。食草のカナムグラは攪乱された土地にもよく生える植物で、チョウも県境付近の防火帯を中心に数が多い。朝霧草原では9月前後に一番数多く見られた。サワヒヨドリ、タムラソウなど各種の花を好む。



アカタテハ

名前のお通り暗褐色の地に赤い紋のあるタテハチョウ。幼虫はイラクサ科植物のカラムシなどの葉を二つ折りした中に潜む。成虫越冬なので春から晩秋までよく見かけるチョウ。林縁性で民家周辺ではよく見るが、茅場のような草原の中で見る機会は少ない。



ヒメアカタテハ

アカタテハよりも暗褐色の部分が少ないので全体に明るい印象を受ける。世界に広く分布しているチョウで、夏の終わりから秋にかけて明るい草地で姿を見る機会が多くなる。食草はハハコグサやゴボウなどのキク科植物で、茅場内ではヨモギに産卵行動しているメスを観察した。



クジャクチョウ

えんじ色の地にクジャクのような模様を持つ美麗種だが裏側は黒一色。山地性のチョウで朝霧高原一帯にも少なからず生息している。食草はつる植物のカラハナソウ。マツムシソウなど草原の花を訪れたり、地面や露岩上に羽を広げて縄張りを主張するかのように止まっていたりする。



アカボシゴマダラ

やや大型のチョウで白黒のまだら模様、後ろばねの先に赤い紋がある。中国大陸から持ち込まれた外来種で関東地方から山梨県、静岡県に分布を拡大してきている。とうとう朝霧高原の根原地区にまで姿を見せるようになった。食樹はエノキ。特定外来種に指定され飼育や生きたものの移動は禁止されている。



ジャノメチョウ

8月頃の朝霧草原に多く見られる暗褐色のやや大型のチョウ。中心に水色の点のある「蛇の目」紋がある。サワヒヨドリ、チダケサシなど各種の花をよく訪れる。食草はススキで、ススキ草原である茅場を代表するチョウである。ススキ草原の減少とともにチョウも各地で少なくなっている。



ヒメウラナミジャノメ

はねの裏側が波模様でそこに目玉模様が並ぶ褐色で小型のジャノメチョウ。初夏から秋にかけて草地上をびよんぴよんとスキップするよう飛ぶ。食草は各種のイネ科植物。各地の草地や林縁によく見られるチョウで、朝霧草原でも多くはなかったがしばしば見かけた。成虫は花にもよく来る。



ダイミョウセセリ

チョウははねを立ててとまるといわれるが、本種は必ず開いたままとまる。黒色の地に白い紋は大名の袴姿をイメージさせる。林縁部を活発に飛び、イヌゴマなど各種の花にも訪れる。食草はヤマノイモやオニドコロで、幼虫は食草の葉の一部を折り返した巣の中に潜む。



ギンイチモンジセセリ

羽の表は黒褐色一色だが裏側は明るい褐色に1本の銀色のスジがある。幼虫は食草のススキの葉を筒状にした巣を作る。朝霧高原一帯では6月初めの年1回の発生。明るい草地の上を弱々しく飛び、シロツメクサなどの花を訪れる。環境省準絶滅危惧種で静岡県でも各地から姿を消してきている。



コキマダラセセリ

明るい褐色のセセリチョウで、幼虫は食草のススキの葉を筒状にした巣をつくる。6月末から7月にかけてノアザミやオカトラノオなど各種の花を訪れる。良質の草地の指標となるチョウで朝霧草原は本種の多いのが特徴といえる。防火帯や割石峠付近など背の低い草地に数多く見られた。静岡県レッドデータ要注目種。



ヒメキマダラセセリ

明るい褐色にへりの部分が暗褐色のセセリチョウ。茅場の周囲の林縁を活発に飛ぶ。食草は各種のイネ科植物。よく似たキマダラセセリは暗褐色部が多く明褐色部とのコントラストが強い。朝霧草原には両種とも生息していて区別は紛らわしいがヒメキマダラセセリの方が多かった。



イチモンジセセリ

褐色のはねのチョウで後ろばね裏側に銀色の点が1列に並ぶのが特徴。各種イネ科植物を食草とし、昔からイネの害虫として知られた。特に9月になると各地で多く見られるようになる。朝霧草原でも夏から秋にかけてキタテハと並んで数の多いチョウだった。イヌゴマ、タムラソウなど各種の花を好む。



ミヤマチャバネセセリ

イチモンジセセリに似たチョウは数種類いるが本種は後ろばね裏側の付け根近くに一つの目立つ白斑があることで区別する。幼虫は主にススキを食草とする。どこにでもいるチョウではないが朝霧草原では8月の集落近くの防火帯でカワラナデシコの花を好んで訪れていた。



オオチャバネセセリ

こちらもイチモンジセセリに似るが、本種は後ろばねの紋が1列でなく互い違いに並ぶことで区別する。イチモンジセセリなどとは異なりネザサを食草とし、背の低いネザサの多い防火帯に見られた。花を訪れることも多い。近年数を減らしてきている。静岡県要注目種。



執筆者

静岡昆虫同好会

清 邦彦

写真提供

清 邦彦

朝霧草原の自然Ⅲ(朝霧草原のチョウ)

平成 31 年 2 月 16 日 発行 非売品

編集・発行：富士宮市根原区

〒418-0101 富士宮市根原区 527 TEL054-452-0778

印刷：ラクスル株式会社

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-24-9 TEL03-4577-9200

この冊子は 富士山の銘水株式会社の助成により作成しています